学びに新しい「挑戦」と「観点」を。 vol.7 2007年8月号

CHUOH 知っ得通信 TRY+ANGLE

2007年8月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2－15－5 http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/

Mail Seminar

感情の論理 vol.6 「沸騰の法則Ⅱ」

先月号に続いて「沸騰の法則」についてお話します。

「沸騰の法則」とは、『人は予測できる時間は待てるが、予測できない時間を待つことが出来ない』という法則なのですが、実は人の成長も、この法則に当てはまります。

運動能力を例に出すと分かりやすいのですが、例えば陸上の選手が毎日 100 メートルを 10 本走ったからといって、毎日 1000 分の 1 秒ずつタイムが縮まるということはありません。

ところが、なかなかタイムが延びない時期を我慢して練習を続けていると、ある時急に、それこそ半年間の間に 1 秒近くタイムが伸びたりします。つまり、人は正比例的に成長するのではなく、3 次関数的な成長過程を見せるのです。これは走力に限ったことではなく、腕力、歌唱力…およそ人の能力と呼ばれるものは、同じ法則を持っています。

急速に能力が向上する時期を「ブレイクポイント」と言うのですが、やっかいなことに、いつブレイクポイントが来るかは誰にも分かりません。すると、多くの人がその前に挫折し、努力を続けることを辞めてしまいます。いつ来るとも分からない時間を待てないのです。

子供の学力も同じですね。

だからこそ、傍（かたわ）らで励まし、リードする指導者、つまりこのメールセミナーを読んでいる「あなた」の存在が重要なのです。

さて、人の成長がそうならば、（人の集約である）企業の…塾の成長にも同じ法則が生きていることに気付かなければいけません。実は、売上や生徒数にもブレイクポイントは存在します。（ここで多くの人にとって耳の痛い指摘をしなければなりません。）

実は、塾経営者の中には、ブレイクポイントを迎える前に諦（あきら）めてしまっている人がいます。そうした経営者の特徴は、自塾が伸びない原因を他者に求めることです。「少子化だから…」「景気が悪いから…」「この地域は教育熱が低くて…」できない理由をリヤカーいっぱい集めても、前に進むことはできません。

こう考えてくると、我々が最も伸ばさなければならない能力が見えてきます。それは「努力」です。努力は誰でもできると思いがちですが、大きな間違いです。

努力は「努める力」。

つまり、伸びない時期を諦めずに「頑張れる力」のことであり、能力の一つです。能力ですから走力や学力と同じように訓練によって伸ばすことができます。その方法は…走力や学力を伸ばす時と同じです。

足を速くしたいのならば、オリンピック選手の走りを見て、走り方の教則本を読んでいるだけでは無理なことはお分かりでしょう。自分が苦しい思いをして走ることが不可欠です。学力も同じですから、今、あなたは子供たちに「苦しい夏期講習」を（心を鬼にして?）実施しているはずです。

この「負荷」と呼ばれるものがなければ、人の能力は伸びないようになっています。もし、経営者が楽をして毎日を過ごしているとしたら、努力も伸びませんし、その塾がブレイクポイントを迎えることもありません。

夏期講習も後半戦。どうぞ「苦しい思い」をしてください。それが「あなた」を成長させ、塾を成長させる源（みなもと）になります。

全国学習塾援護会 森 智勝

今月の気になるハナシ

小・中学校の２学期制の背景と課題

『２学期制』とは、１年間を、前期（４月～１０月上旬）と後期（１０月下旬～３月）に分けるもので、小・中・高校で導入・実施されているのは周知の事実です。前期と後期の間に、「秋休み」を設ける・設けないなど、学校によって、細部は異なります。しかし、なぜ『２学期制』が導入されるようになったのでしょうか？

１．『2 学期制』導入の背景

『２学期制』導入の継起となったのは、平成８年に行われた中央教育審議会の答申です。テーマは、「２１世紀を展望したわが国の教育」で、今後の日本の教育について述べられています。その中で基本となっているのが、「＜ゆとり＞の中で、子どもたちに＜生きる力＞を育んでいくこと」という考え方です。

そうです。いわゆる「ゆとり教育」の根幹にある考えです。これをもとに、新学習指導要領の基本的な考え方が作られ（平成１０年）、平成１４年４月、新しい学習指導要領が全面実施されました。

これにより、「総合的な学習の時間」の導入や「絶対評価」への変更など、人間形成や個人に重点をおいた指導が実施されました。しかし、それまであった問題にあわせ、新たな問題も出てきました。

まず有名なものが、「授業時間数の減少」です。完全週休５日制と「総合的な学習の時間の導入」により、各教科の指導時間が減り、『基礎・基本の確実な定着』を目標に掲げながら、実際には達成することが困難な状況に陥りました。

さらに「相対評価」から「絶対評価」への変更が、問題になりました。「絶対評価」の実施と、充実した生徒指導のためには、それぞれの生徒と一対一で向き合うことが大切です。しかし、少ない授業時間で個人を評価することの難しさや、学期の長さが違うことによって、評価の均等性が保たれないことで、評価の正当性・信頼性が疑問視されているためです。

他にもさまざまな問題が挙げられてきたわけですが、それらの多くは、やはり、時間に関わる問題でした。そこで、時間を確保するための手段として、授業・行事の計画が工夫しやすい『２学期制』を導入する学校が増えてきたのです。

『２学期制』を導入すると、３学期制の１、２、３学期の学期区分による最大２０日以上の授業日数の差は、前期、後期の学期区分により、ほぼ同数の授業日数となります。さらに学期数が１学期減ることで、定期テストの回数・日数と始業式・終業（修了）式が減り、約５日間、授業日数の確保が可能になります。以上の点を踏まえ、『２学期制』の導入は、「授業時間数の確保」と「評価の改善・充実」が達成できると考えられているのです。

２．『2 学期制』の今後の課題

『２学期制』は、これまでの課題を解決する方法として、今後も多くの学校で採用されていく可能性が十分にあります。しかし、導入することによって新たに出てくる課題や、３学期制を実施している学校との違いによる問題などがあることも事実です。

代表的なものとしては、以下の３点が挙げられます。

（１） 生徒、保護者への説明責任

『２学期制』導入により変わることについて、生徒や保護者の不安・意見を正しく把握し、それを解消するための具体的な取組みを、明らかにしなくてはなりません。

（２） 評価の充実と保護者との連携

学期末の評価場面が、年間３回から２回になることにより、結果の評価だけでなく、学習場面ごと、単元ごとの評価を行い、指導に役立てる必要があります。さらに、評価場面が３回から２回になることにより、保護者との関係が弱くなる可能性があり、保護者面談・家庭訪問など、生徒の学習状況などの情報を、これまで以上に共有する必要があります。

（３） 受験時の３学期制の学校との違い

通常、受験生の成績評価は、受験年度の４月～１２月までの学習状況を評価して提出されます。３学期制の場合、１学期と２学期の成績をもとに作成することができますが、２学期制の場合、前期と後期の初めをもとに作成しなければならないため、評価が難しくなってきます。さらに、３学期制の学校と２学期制の学校の評価を、同じものとして考えて良いのかという根本的な問題もあります。

今は、３学期制の学校が多いことから社会全体が、３学期制を基本として考えています。しかし今後、２学期制が増え、３学期制と同数もしくは逆転したとき、「どうするか・どうなるか」を、今の段階から考えておく必要があるのではないでしょうか。

２学期制の導入について言えるのは、「生徒」も「教師」も『ゆとり』をもてる環境を作ろうということです。ここでいう『ゆとり』が、時間なのか、心なのかは、それぞれの学校に関係する人々の行動と判断にゆだねられます。『ゆとり』がある教育をめざした結果が、『ゆとり』ではなく、『（気の）ゆるみ』がある教育になってしまったら意味がありません。変えて良かったと思える・思われる、学校作り・教育環境づくりを期待したいですね。

※今回の内容は、広島市の小・中学校の２学期制をベースにしています。地域によっては、異なる部分がありますので、ご了承ください。